

本を紹介します

親と子と教職員の教育相談室 徳永恭子

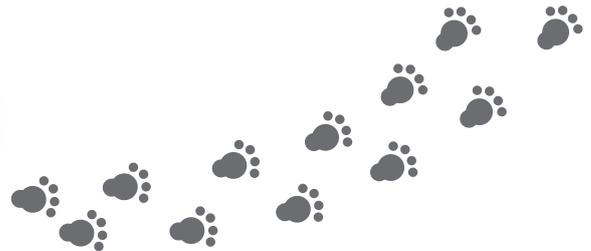
「暴力は絶対だめ！」

アストリッド・リンドグレン 石井登志子訳 2015年8月（岩波書店発行）

「長くつ下のピッピ」の作者リンドグレン（児童文学作家）が、「Never Violence」という本を出しました。この本は、1978年、ドイツ書店協会平和賞を受けた時のスピーチを本にしたもので、38Pからなる短い作品です。当時スウェーデンでも体罰・虐待が問題になっている状況の中で、リンドグレンは「物事を解決するには、暴力以外の別の方法があることを、私たちはまずは自分の家庭で

お手本として示さなくてはならないのです」と強く訴えています。そうすることで少しずつではあっても世界平和に貢献できると述べています。この課題は、今なお直面している課題です。戦争・暴力・虐待・体罰などの暴力にどう立ち向かうか、なぜ暴力はいけないのか、希望はどこにあるかを示している本だと思います。ちょっと手に取って読んでみませんか？

つぶやき



「ともに学ぼう」 山形県高等学校障がい児学校教職員組合 副執行委員長 福澤 美幸

障がい児学校で担任をしていたとき、何をするにも「できな—い。」という生徒がいました。はじめは、障がいにより本当にできないものと思い、前担任から引き継いだ通りの支援を行っていました。あるとき、生徒が次の授業に行くため廊下に出ようとしていました。肢体不自由の生徒で手を上手く使えず、教室のドアはいつも教師が開けていました。ただ、その時、他のクラスメートの指導で手が離せず待っててもらいました。生徒は、廊下から友だちの声が聞こえてくるし、どうにかして廊下に行きたくて仕方ありませんでした。すると、ドアの取っ手を自分で握り、動かせる範囲で何度も手を動かして自分でドアを開けることができたのです。今までの私たちの思い込みが本人の活動の幅、能力の幅をどれだけ狭めていたのか、痛切に反省した場面でした。できるだけ待って支援をしてきたつもりが、いらぬ手を出し、いらぬ口を挟

み、やろうとする気持ち・学ぼうとする気持ち・伝えようという意思を私たちは奪っていたのです。その時から、彼は何が出来るのかも一度見直して、自分が出来ることは自分で出来るような支援に変えていきました。すると、できることが実にたくさんありました。水も自分でペットボトルを持って飲めるようになりました。こぼしてしまっただけで冷たい思いをするなど失敗はありましたが、できることが着実に増えてきました。転勤するとき、その生徒から手紙をもらいました。「ぼくにはできるわけがないとおもっていたことが、せんせいとであってから『これってじぶんですることなんだ？』にかわり『ぼくができること』にかわっていきました。」そして、「せんせいのせいしんは、ははにひきつがれました。」何よりもうれしい手紙でした。この手紙は、私の宝物であり心の支えです。